第 53 号

2019 年 3 月 15 日

会報

青山学院大学
日本文学会

（題字）湯池　孝先生

巻頭随筆

「国際」の日常化

日本文学会会長　佐伯　眞一

今年度は、私の担当する大学院の授業が正式には成立しなかった。青山学院大学に来て初めてのことである。博士前期課程の学生が無事に修了した後、単位を必要とする学生が受講していないためで、公式には大学院の授業は担当していないことになる。しかし、実際には例年通り、毎週「院ゼミ」と称する集まりを持っている。博士後期課程在学中で単位を必要としない人たちが昨年に引き続き出席しているので、昨年までとの違いはあまり実感できないが、非公式にあちこちの人が来てくれているので、形式的には私的な研究会のようなものである。本学を卒業して他大の大学院に進んだ人も来ていれば、もともと本学の学生ではない人も来ている。

他学科や他大学から色々な人が出入りして、誰が正式の受講者かよくわからないようになるのは以前からよくあったことだが、最近は外国籍の人が増えてきたことに時代の流れを感じている。中国から博士論文執筆のために来日している人、やはり中国から来て他大の大学院に在籍している人、ヨルダン出身でアメリカの大学院から日本に留学している人などが、今年のメンバーである。皆さん、何らかの意味で私の専門に近いことを研究しているが、話題は多岐にわたり、私も勉強しないとついて行けないことがしばしばである。

今年、もう一つ時代を感じているのは、博士後期課程の杉山和也君が、名古屋大学が中心となって行っている「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」（通称「頭脳循環」）の一員として、半年近くヨーロッパ（フランス・ドイツ）に行っていることである。同プログラムは、「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」として、学術振興会のもとで行われているもので、若手研究者を通算二年間ほどヨーロッパなどに送り込み、授業や研究に従事してもらうという企画である。それを聞いた時は、杉山君は渡欧期間中は「院ゼミ」に参加できないと思ったのだが、実際にはほとんど毎週、スカイプで参加してくれることになった。頭の古い私は、スカイプでのゼミ参加などということが本当に可能なのか、半信半疑だったのだが、これがやってみれば十分できるものだった。こちらの研究室でやっている発表や質疑を向こうで聞いて意見を述べてもらうだけではなく、事前に添付ファイルで資料をもらっておいて、ヨーロッパにいながら研究発表をしてもらい、こちらはそれを聞いて意見を述べ、みんなで討論するということも、ちゃんと成立した。今後、外国在住の方々の発表を聞くのにも活用していきたいと考えている。アメリカ在住だろうがロシア在住だろうが、招聘費用がなくても意見交換ができるならば、もっとさまざまなことができるようになるかもしれない（追記―その後、実際にロシア在住の研究者が参加してくれている）。

時々不思議な感じがするのだが、目の前には外国籍の方々がいて、スカイプの画面の向こうには見慣れた杉山君がいる。内側と外側が逆転したような感覚だが、これも「国際」が日常化した一つの表れだろうか。それにしても、もともと至ってドメスティックで語学も全然できない、おまけに機械音痴の私のような人間が、若い人たちにスカイプを操作してもらってこんな日々を送ることになるとは、少し前まで想像もできなかった。ご縁というべきなのか、神のご配慮と思うべきなのか、ともあれしみじみ有り難いことである。

研究余滴

文学史マラソン

日本文学科教授　佐藤　泉

私は二〇〇二年に青学の文学部日文科に移ってきましたが、その前には同じく青学の女子短大国文科に在籍していました。その短大もまもなく幕を引くことが決まり、このところよく短大時代のことを思い出します。過ぎ去った過去はすべて美しいわけですが、中庭に射すあたたかな日差しを感じながら、なごやかな環境のなかで日々の授業をしていたという絵をもっぱら思い浮かべます。

ただ、短大生にとってもなごやかな授業であったかどうか、その点は解りません。これは青山短大の一種の伝統となっていましたが、「近代文学史」の授業で「文学史マラソン」を宿題に課していました。二葉亭四迷『浮雲』に始まり、坂口安吾『白痴』にいたる明治・大正・昭和の重要な作品、合計六〇冊を読み、それぞれ感想文を提出せよ、という課題です。しかも岩波文庫で出ているものは岩波文庫版で読むこと、という条件が付いていました。通年授業でしたから、夏休みに遅れを取りもどしたり、読みためたりというやり方ができますが、一月にならすとだいたい七冊か八冊を読まなければなりませんし、必修科目である以上、卒業するためにはだれしもこの宿題をやり遂げねばなりません。中途で倒れる者も若干名出ましたが、大半の学生は六〇冊を読破し、「学生時代のよい思い出」を作っていました。

と、ここまでは牧歌的な思い出ですが、その後、文学部に移ってからの私の研究にとって、この文学史マラソンが重要な意味をもつようになります。「文学史」とは何か。それが私の研究テーマとなりました。文学史家の問題意識によって、六〇作品なら六〇作品がさまざまに並べ替えられます。場合によっては、ふるいにかけられ黙殺される作品もあります。逆に、これまでの文学史では言及されなかった作品が、問題意識の変化によって「再発見」されることもあります。女性の権利が軽視されている間は、女性作家の作品が文学史的に正当な位置に置かれることはありませんでした。マイノリティの日本語作品も、注目されるようになったのはごく最近のことです。ということは文学史は常に書き換えの可能性に対して開かれていることになります。歴史は過去の事実であるとともに、歴史家の問題意識によって変容を遂げるもの、その意味でいつでも「現在」に生きる人間が主体的に作り直していくものなのだということを実感できました。…なお、六〇冊のリストを知りたい、という方がもしいたら、ぜひご一報ください。よろこんでお知らせします。

第53号　目　次

巻頭随筆　2
研究余滴　3
日本文学会春季大会　4
日本文学会秋季大会　6
二〇一八年日本文学科の活動　7
研究レポート　8
海外で活躍する日本文学科生　11
日本文学科留学生の動向　12
卒業生・四年生からのメッセージ　13
夏期集中講義　16
研究室探訪　17
院生部会報告　19
今年度の学生の活躍　19
日本文学科同窓会から　20
二〇一八年度講義題目　20
研究室だより・編集後記　24

日本文学会春季大会

講演：吉川英明氏（吉川英治記念館館長）

「素顔の吉川英治とその作品」

博士前期課程一年　新田　杏奈

二〇一八年六月九日（土）、青山学院大学日本文学会春季大会が青山キャンパス一七号館一七三〇九教室にて開催された。

この度は講師として、昭和の国民的大衆小説家吉川英治のご長男でいらっしゃる吉川英明（えいめい）氏をお迎えし、「素顔の吉川英治とその作品」と題してご講演を頂いた。講演の中では肉親ならではの貴重なエピソードの数々が語られ、どれも大変興味深かった。

英明氏の父、吉川英治の代表作と言えば『宮本武蔵』（全六巻、講談社）があまりにも有名である。今日一般の宮本武蔵像はまさにこの作品に拠るところが大きい。英明氏のお話によれば、この作品が世に出る以前の宮本武蔵像は必ずしも統一されたものではなかった。その人間像については論争が絶えず、英治が武蔵を描きっかけも、作家仲間である菊池寛、直木三十五の間で盛んに取り交わされた武蔵論争であったそうだ。

講演後、英明氏から少しお話を伺うと、武蔵に関する文献が少ないため、英治が参考にした資料はそれほど多くはなかったという。その少ない資料の間を埋めていたのはまさに作家としての英治の直観であった。その鋭さには、後に英治の取材旅行で書いた内容が事実とほぼ符合していて、驚くことが多々あったという。

それだけに、英治が描く武蔵像には吉川英治本人の姿が濃密に投影されていると言えるかもしれない。このことについて英明氏は講演の中で興味深いエピソードを話してくださった。「父の背中に家族が心配するほどの腫物が出来た時、誰が説得しても固くなに病院に行かなかった。しかし、ひと月経った頃、傷口から膿があふれ出したかと思うとすっかり治ってしまった」。実際に、これと似たような話が武蔵の中にもあったそうで、英治と武蔵の気構えにはやはり相通じるところがあるのだろうと思った。

英治の作家人生もまた、波乱に満ちたものであった。特に英明氏にとって、優しくも怖い存在であった父英治が生涯に二度だけ涙を見せたお話は最も印象深く残った。一度目は東京大空襲で御養女を亡くされた時の話、二度目は玉音放送で終戦の詔勅を聞いた時の話である。

終戦の日、英明氏は「これからラジオで大事な話があるから」と、外に出るように言われ、帰ってくると仏間で声を上げて泣く英治の姿を目の当たりにしたという。この時、英治は「我々は今から変わらなければならない」という言葉を口にして、その日から暫く創作の筆を絶った。

しかし、世間は人気作家吉川英治の才能をそのままにしておかなかった。編集者や新聞社員が自宅まで押し寄せ、連日執筆の再開を請うたのである。英治は遂に断り切れず、再び筆を執ることになった。

その代表作の一つが『新・平家物語』である。それまでは平家敗残の視点から語られることの多かったこの物語を遂に平家の視点から描こうと力を注いだのである。私はここに英治の戦後の心境を感じる思いがした。

晩年の英治は「人生は楽しむものだ」という言葉を繰り返したという。それは決して享楽的に生きるということではなく、与えられた人生を心から楽しんで生きるということであった。講演を通し、作家として波瀾万丈の人生を生き抜いた吉川英治の素顔に触れた今、なぜ吉川作品が時代を超えて多くの人々の心を深く捉えて来たのか、その魅力の一端を知ることが出来たように思う。

春季大会研究発表報告

音声言語と文字言語との交渉

博士前期課程一年　天野　早紀

去る二〇一八年六月九日、青山学院大学日本文学会春季大会において「文字に聴く『萬葉集』防人歌のことば――創り出された東国方言――」と題して研究発表をしました。

『萬葉集』防人歌及び東歌は、東国農民の発したことばの「音声」が、当時識字層であった中央官人の耳による聴取・「文字」への変換を経て残されたものです。音声と文字、さらには母語を異にする使い手達が交渉するその複雑な編纂過程には、相当な技術的困難があったはずです。

それは筆録の精度の差を生み、実際の表記面にも混乱を生じたでしょう。しかしそれが全く感じられない不審な例があります。中央語の形容詞連体形（シ）キが東国語の発音では訛って（シ）ケとなった転訛語形が、発音の上で防人歌乙類・東歌甲類と、ほぼ同時代の文献上で明確に二分されているのです（上代ケ音節には[ke]と[kë]と二種類の発音がありました）。この表記面は、人為的な操作、編集時の文字の上での創作が双方に施された結果に違いありません。このとき特に防人歌の側、編集者中央人の前提（（シ）キは甲類[ki]）に馴染まない、非中央的な乙類[kë]一方にわざわざ寄せたことには、より重要な意義がありました。それは東国転訛語形に文字の上でさらに東国性を強調した現実以上の東国方言「創り出された東国方言」であったのです。

本発表は卒業論文の構想を基にしたものですが、その編集過程で、頭の中で考えていた曖昧なものが、「文字」と、そこからさらに「音声」という二つの在り方を得、まさに生きて立ち上がっていく感覚を得ました。自らの研究を様々な文脈に置き、錬磨し、さらなる可能性を与える貴重な経験となりました。このような機会を頂いたことに、またご来聴下さった皆様に心より感謝申し上げます。

器物の怪の日中比較

二〇一七年度卒　佐藤みなみ

「器物の怪」とは、人間の手によって作られた器物が霊性を獲得し、変化したり怪異を起こしたりする現象で、従来これらは日本独自のものとされてきた。しかし近年では中国の説話集『太平広記』（九七八年成立）と日本の『付喪神絵巻』との影響関係が指摘され、日中比較の観点から、考察の余地のあることが示されている。本稿では主に室町時代以前の日本の諸作品と、中国の説話集『太平広記』中の器物による怪異の説話とを比較・考察した。

日本の器物の怪説話は、『今昔物語集』『化物草子』『付喪神絵巻』等に見える。『今昔物語集』『化物草子』中の器物の怪は、人の形をとって現れ、人間に危害を加えることはない。それに対して『付喪神絵巻』での器物の怪は異形の妖怪として描かれ、人や家畜を取り食らう。

また、調査の結果『太平広記』の器物の怪説話の特徴は「人間の日常生活で必要とされる器物が怪異を起こす」「人に深刻な害を与えない」「器物の性質をとどめた人間の姿に化ける」の三点と言える。日本の諸作品と比較すると、これらの特徴は『今昔物語集』『化物草子』の説話に引き継がれ、『付喪神絵巻』には明らかに異なる発想が含まれることがわかる。

本稿での考察を通じて、『太平広記』と非常に近い形の器物の怪説話は『今昔物語集』に見受けられること、日本の器物の怪には二つの系統（人の姿で無害なもの、異形の姿で有害なもの）が存在したことの二点を提示することができた。

春季大会『幽霊塔』論省察

博士前期課程二年　高見　勇樹

二〇一八年六月九日の青山学院大学日本文学会春季大会にて、「『幽霊塔』論―A・M・ウィリアムスン『灰色の女』から続くリライトの系譜―」という題目で発表させていただきました。

『幽霊塔』という名前を冠する小説は大まかに分けて二つ、黒岩涙香がアリス・マリエル・ウィリアムスンの小説『灰色の女』を基

にして書いた翻案小説『幽霊塔』と、そして江戸川乱歩が涙香のものをリライトして書いた『幽霊塔』があります。今回の発表では、ウィリアムスンの『灰色の女』、涙香版『幽霊塔』、乱歩版『幽霊塔』をそれぞれ比較し、各作品における物語の変化とその理由について注目しました。

原作『灰色の女』の題名ともなっている。「灰色の女」のモチーフが乱歩版『幽霊塔』では描写がなく、それに伴いヒロインに関する血縁関係のロマンスが削除されていることは興味深い発見でしたが、その動機に関する考察についてはまだまだ至らない点があったかと思います。乱歩が「通俗的面白さ」を優先させたが故に「灰色の女」のロマンス部分が削除されたと説明しましたが、その根拠に関してはまだ弱く、地盤を固めていく必要を感じました。

また質問に関しても上手く答えられず、不甲斐なさを感じざるを得ません。乱歩の「通俗的面白さ」に関するさらなる考察、また黒岩涙香についての分析もより緻密に行っていくことが今後の課題になると実感しました。

日本文学会秋季大会

講演：篠原　進先生（青山学院大学名誉教授）

「瀕死のアヴァンギャルド―SAIKAKU 1673」

博士後期課程　岡島　由佳

前日の雨もあがり、秋晴れのさわやかな一日となった二〇一八年十月二十七日（土）、日本文学会秋季大会が開催された。講演会には本学の前副学長であり、現在は青山学院大学名誉教授である篠原進先生をお招きした。聴衆は、本学の在学生・卒業生はもちろんのこと、当日はインドのビッショ・バロティ（タゴール国際大学）との交流行事の一つとして、シンポジウムが開かれていた関係で、インドの方をはじめ、留学生の姿も多数見受けられた。

先生のご専門は近世文学。前衛的・独創的な観点から西鶴をはじめとする浮世草子作品のご研究をされている。

ご講演の題目は「瀕死のアヴァンギャルド―SAIKAKU 1673」。これは、実相寺昭雄氏の「瀕死のエクリチュール―追跡『好色一代男』」を、「SAIKAKU 1673」は前田愛氏の「BERLIN 1888」を踏まえたという。西鶴が得意とした手法、すなわち「知る人ぞ知る」という「ぬけ」を利用した趣向である。暗示的手法を用いた謎かけに、冒頭から引き込まれていった。

テーマは、ハロウィーンの季節に因んで「変身」である。「人はばけもの」（『西鶴諸国はなし』序）と記した言葉を踏まえ、西鶴がいかにして「アヴァンギャルド」に「変身」しえたのかと投げ掛けられた。それを解き明かす鍵は、四つの転機だと先生は語る。では、その転機とは何だったのだろうか。ここではご講演の一部を紹介していきたい。

まず、一つめの転機は西鶴三十一歳（寛文十二年）の時に訪れる。「清水万句」の選に漏れた時のことをこう記している。「世人阿蘭陀流などさみして、かの万句の数にものぞかれぬ。（中略）そしらば誹れ、わんざくれ（下略）」（『生玉万句』序）。「見たことがないものが出てくると初めのうちは戸惑う。なんだかんだと文句を言う、けれどもそのうちに、受け止める。浮世絵も印象派もそうだった」（原田マハ『たゆたえども沈まず』）という言葉に収斂された前衛的精神に象徴されるように、最初は「阿蘭陀流（異風）」と批判され落選。それを契機に奮起し、「アヴァンギャルド」路線を宣言する。次の転機は三十四歳（延宝三年）。妻の死去にショックを受けた西鶴は俳諧に打ち込んだ。妻の死を乗り越えて絶頂期にさしかかった頃、またしても悲しい出来事が西鶴を襲う。西鶴四十一歳（天和二年）、宗因の逝去である。

二〇一八年度 日本文学科の活動

日本文学科教授　小松　靖彦

悶々とした思いを俳諧と異なる世界、すなわち浮世草子の世界へとぶつけていくことになる。それから六年後、西鶴四十七歳（元禄元年）、「鶴字法度」が制定される。それによって、十五年使い続けた名前を変えることを余儀なくされた。窮地に追い込まれ、西鵬と改名した「瀕死のアヴァンギャルド」は抵抗姿勢を創作に注ぎ込む。

こうしてピンチ（四つの転機）をチャンスに変える西鶴のバイタリティ溢れる底力が伺える。

西鶴の言う「人はばけもの」（『西鶴諸国はなし』序）とは、「人は時とともに変わり、運命や環境に応じ、化けざるを得ない不安定で可変的な存在」を意図していると先生は考察する。変身せざるを得ない境遇に身を置いた西鶴は、斬新な発想もやがてはスタンダードなものへと移ろって行く前衛的精神の宿命を熟知し、様々なものに反応して変身していたのだろうか。

当日のパワーポイント資料は六十四枚。時間の都合で割愛されたが、西鶴が残した七つの手紙や西鶴と同時代の紀州藩の家老・三浦家に仕えた石橋生庵が記した『家乗』についても、お聞きしたかった。

ビッショ・バロティ（タゴール国際大学）日本学科との交流行事

二〇一七年度、本学はインドのビッショ・バロティと学生の相互交換協定を締結した。両校の交流を一層深めるために、二〇一八年十月二十六日（金）から二十八日（日）に、本学日本文学科はビッショ・バロティ日本学科の教員・大学院生・学部生を招いて、「日本とインドの近代化再考」をテーマとする交流行事を開催した。

二十六日にはビッショ・バロティ日本学科長のギータ・A・キニ氏が、母の役割の変化や多言語が失われる危険性など、身近で起こりつつあるインドの近代化の問題について講演し、これに佐藤泉氏が、普段気付かぬものを可視化するところに「近代化」を論じる意味があるとコメントし、日本とインドの近代化を再考するための共通の枠組みを明確にした。

二十七日午前には、安藤優一氏、新田杏奈氏、ピヤリ・ロイ氏、シュボジット・チャテルジー氏、デバンガナ・バッタチャルヤ氏ら両校の大学院生が、午後にはハ・ゴンウ君、SK・ジュエル・ハック君、小舟萩さん、鈴木彩瑛さん、マトゥーラ・ダス君、狩野祐輝君、伊藤遥さんら両校の学部生が、「日本とインドの近代化」について研究発表をした。

発表を通じて、自然・科学技術・西洋化・伝統・女性などのキイワードが浮かび上がった。インドの女性たちが教育によって家庭内暴力から抜け出す術（すべ）を得たというロイ氏の話は特に強い印象を残した。その後、大屋多詠子氏の指導で両校の教員・学生が俳句を制作した。

二十八日はキニ氏・小松の引率で、両校の学生が「江戸から東京へ」（江戸東京博物館・浅草寺・水上バス・浜離宮・銀座）を実体験する小旅行を行い、忘れ難い一日となった。

国立リュブリャーナ大学文学部日本研究専攻との交流行事

二〇一八年十二月八日（土）・九日（日）に本学日本文学科は、学術交流協定に基づいて、スロヴェニアのリュブリャーナ大学文学部日本研究専攻の教員・大学院生（他大学院への進学者も含む）・学部生を招いて、交流行事「コソヴェル・プロジェクト」を開催した。

プロジェクト名はスロヴェニア

の代表的近代詩人スレチュコ・コソヴェルにちなみ、日本とスロヴェニアの双方から「ことばの身体性」を考察することをめざす。

八日午前に、まず佐伯眞一氏、山本啓介氏、アンドレイ・ベケシュ氏、守時なぎさ氏ら両校の教員、引き続き天野早紀氏、新田杏奈氏、ニーナ・ハビャン氏、リヤ・ガンタル氏、ミシェラ・アタナソフスカ氏ら両校の大学院生が、各自の研究テーマに即して「ことばの身体性」について研究発表した。発表と熱気を帯びた質疑応答は、ことばと音楽の間に存在する多様な関係を改めて私たちに気付かせた。

九日午前は、スロヴェニア文学の専門家・三田順氏（北里大学）とアニタ・スレブニク氏を迎え、これに小松が加わり、コソヴェルについての日本初のシンポジウムを開催した。コソヴェルの印象主義的作品と日本文学との近さや、構成主義的作品の魅力を学んだ。

午後は、佐久間香乃さんとサラ・クレチさん、狩野祐輝君とガンタルさん、伊藤遥さんとアタナソフスカさん、青野莉奈さんとハビャンさん、朴賢率君とナディヤ・ボスティッチさん、ハ・ゴンウ君とカヤ・カウチッチさんがそれぞれ組になって、昔話や詩歌の比較研究の成果を発表した（比較研究のアイディアは青野さんの発案）。その相違点と共通点は互いの文化を深く理解するための第一歩となった。

研究レポート

江戸時代のボーイズラブ？
―『男色大鑑』の韓国語訳に向けて―

1A　ハ・ゴンウ

『男色大鑑』は井原西鶴の作品の中でもあまり注目されなかった作品である。しかし、畑中千晶氏が「『男色大鑑』は西鶴浮世草子の中で、おそらく最も海外で読まれているものではないだろうか（『鏡にうつった西鶴』おうふうH21. 12）」と評価しているように、海外にはない不思議な魅力を持つ作品である。にもかかわらず、未だ韓国での『男色大鑑』研究は皆無に近く、翻訳もされていない。そこで本稿では、韓国語訳への礎として『男色大鑑』巻二の三「夢路の月代」を取り上げ、これまでの翻訳に「命」という表現の省略があったことを指摘し、新たな解釈を試みる。

巻二の三「夢路の月代」は『男色大鑑』の中でも異彩を放つ一話である。というのも、古今に類をみない若衆好きの丸尾勘右衛門が、多村三之丞という若衆が川に吐いた唾を雫ももらさずに飲み干す描写があるからだ。以下は勘右衛門が三之丞の唾を飲んだ後の台詞である。

原文：「只今の御つばき、行水につれて泡の間もなく消る命と惜み、すくひあげて呑つる物を」

現代語訳：「ただ今のお唾、流れる水につれて間もなく泡と消えてしまうのを惜しく思いまして、掬い上げて飲んだのです」

英訳：「The truth is, I so hated to see your precious saliva disperse and disappear in the water's flow that I scooped it up and swallowed it」（原文・現代語訳共に明治書院、英訳にスタンフォード大学出版のものを用いた。）

このように、現代語訳・英訳では原文にある「命」という単語を省略している。しかし「命」と表現したところに三之丞の人物像を捉える上で重要な手がかりが隠さ

れている。

この話について、染谷智幸氏は「勘右衛門が三之丞の唾を飲むことによって、勘右衛門の三之丞への深い情愛と三之丞の口中の清らかさを描写したと見るべきである（『西鶴小説論―対照的構造と〈東アジア〉への視界』翰林書房 H17.4）」と評価した。確かに『男色大鑑』と同年刊の『男色十寸鑑』には若衆に対し「第一口中清らに有べし」とあり「唾を飲む」ことが三之丞の口中の清らかさを描写したという意見には筆者も同意である。しかし『男色十寸鑑』には兄分に対しても「口中清らならぬは、若衆大きにきらへり」とあり、口の清潔は若衆に限らず兄分に対しても同様に求められたと見るべきである。

また「我口中に消ずあつて、甘露不斷の樂しみもがな」という表現において「甘露」という単語は、仏教での「天から与えられる甘い不老不死の霊薬・神酒（日本国語大辞典）」という意味を持つ。というものの「唾」=「美味しい神酒」とするのは飛躍した解釈であり、三之丞の清潔さと勘右衛門の情愛を表現するための比喩であるとするのが妥当であろう。

このことから「命」という表現には三之丞の身だしなみを類推できるだけでなく、勘右衛門の自分の身だしなみをも構わない若衆好きな性格を含んでいると考えられる。

以上、本稿では韓国語訳に向けて『男色大鑑』巻二の三「夢路の月代」で今まで訳本に「命」という表現の省略があったことを指摘し、新たな解釈について考えてみた。しかし、未だ同時代の作品で「唾を飲む」描写は見つかっていないため、今後さらに調査していきたい。

Singularity is…?

1B　小舟　萩

「Singularity is near.」が叫ばれた時代は終わり、今日我々が生きる世界は「Singularity is here.」の時代に突入しているらしい。「Singularity」とは、人工知能の権威、レイ・カーツワイル博士により提唱された「未来予測の概念」である。日本語で言うと、「技術的特異点」。人工知能が我々人類の知能を超える転換点のことである。確かに、私たちの生活は人工知能によって支えられている。既に我々は特定の分野において、人工知能に越えられているだろう。検索すれば、今から乗る電車の時刻から、知らない言葉、概念、行ったことのない場所まで、ものの数秒で私たちの前に顕在化してみせる。人工知能には森羅万象が詰まっていると言えよう。加速度的に進む社会のＡＩ化に伴いなのか、文学をはじめとする教養（基礎科学）科目の地位は下がっているのが現状だ。実学と呼ばれる諸学問を否定する気は全くないのだが、どうも文学は不当な扱いを受けているように感じる。しかし、人工知能の果てしない進化の中で、我々にいま問われる能力こそ、文学から生まれるものだと思う。「考える力」をここでは「どうしてそうなったのか、ものごとの背景を考える力」と定義する。つまりそれは「人を理解する力」とも言えよう。人間の感情は、とても複雑だ。ヒトは褒められて怒ることもあれば、貶されて喜ぶこともある。一足す一が二ではなかったり、Ａ＝Ｂ、Ｂ＝ＣでもＡ≠Ｃというようなことが平気で起こる。「０か１か」ではなく、その０と１の間のグラデーションに意味があったり、美しい数式では表せないような醜い感情をヒトは抱いたりもする。その複雑怪奇なヒトという生物が何百年、何千年という途方もない時間をかけて築いてきた学問が文学である、と私は思う。だからその積み重ねられてきたものを守り、更に次の世代へと手渡せるように、祈りにも近い気持ちで私は文学と向き合っている。文学は奥深い。一年生の前期を通し、積み上げられてきた書物の歴史、昔の人々の想いの込められたくずし字、時代によって変わる義経像、悪文で伝わる本当の気持ち、様々な表象装置の在り方、海外からの視点を通して捉え直す日本文学、本当に幅広く学び、改めてこう思った。文学は私たちそのものだと。文学は生きている。私たちと同じように、今も、何千年も前から呼吸を続けている。文学は決して普段の生活から切り離された存在ではない。私たちに寄り添う存在なのである。文学理解が人間理解につながる。人工知能の発展は目覚ましい進化を遂げた。しか

し、「どうして山椒魚は悲しんだのか」、「どうしてメロスは激怒したのか」、人工知能にはわかるまい。その「どうして」がわかること、それこそが私たちの「考える力」であり、ＡＩと対峙したときに、我々に求められる力ではなかったか。人工知能は素晴らしい。我々人類も彼らに負けず劣らず素晴らしい存在であるべきだ。そのために、今こそ我々人類が人類たる所以を求め、我々が我々であり続けることができるように、文学の道を、先生、先輩、友人とともに邁進していきたいと思う。だから私は最後にこう唱える。「Singularity is here, but never here.」

スロヴェニアとの文学交流のために

2B　青野　莉奈

中央ヨーロッパにスロヴェニアという国がある。日本とは深い交流の歴史があり、文化の面でも温泉やソバなど多くの共通点がある。

異文化と交流する際に重要となるのは「共通のもの」を見つけるということ。それが両国間に文化面には存在する。それならば文学の面ではどうだろう。小松靖彦先生「相互理解のための日本文学研究―日本文学研究の国際化の方角」（『リポーと笠間』No.63）によれば、近代詩人スレチュコ・コソベの「シクラメン」という詩における月夜の静寂と沈黙は、スロヴェニアの風土に根差したものでありつつ、日本の月の詩歌とも響き合うという。

私たちは昔話や歌などに幼い頃から触れたり、一年を通して様々な伝統行事に参加したりすることで、日本人のものの見方を自然と身に着けてきた。それは全ての国において同じであろう。ということは、日本に通じる月の詩を作るスロヴェニア人と日本人のものの見方には、共通点があることを意味している。そこで、私はスロヴェニアと「文学交流」をするための基盤としては、両国のものの見方や考え方の根底を作ってきた、お互いの国の昔話や童話などの文学と古くからある歌・詩歌が良いと考える。

昔話や童話というのは、こどもが初めて触れる文学である。こどもの想像力や価値観・善悪の判断等の教育を目的とすることが多いため、昔話や童話には各国の文化の特徴が出る。小松先生によれば、両国の昔話には似ている点がある。互い似ている昔話の共通点・相違点を研究することが、「文学交流」となるだろう。

ここで一つ例を挙げてみよう。日本には「鶴女房」「蛇婿」など、動物との結婚を題材にした昔話（異類婚姻譚）があるが、悲劇的な結末を迎えることが多い。しかし、スロヴェニアの「針ねずみになったヘンリ」という話（針ねずみになってしまったヘンリは、王様を助け、その褒美として娘を嫁にもらう。娘に愛されたヘンリは人間に戻れ、幸せになる）では、結婚相手の動物は実は人間で、最終的には幸せな結末を迎える。同じ異類婚姻譚であっても話の内容・結末には大きな違いがある。比較することで、両国の動物・自然・不思議な力に対する考え方の違いが見えてくる。

また、歌や詩歌というのも「文学交流」において大事なものの一つである。日本人なら誰もが聞いたことのある日本の童謡（「さくら」「茶摘み」「虫の声」「雪」等）は、身近にある四季折々の風景を表したものが多い。交流の際はこれらの詩歌を実際に歌ったり、伝統楽器で演奏したり、内容における考え方や感じ方の共通点や違いを見出したりしてみる。一方で、スロヴェニアの童謡や民謡についても学び、日本の歌と比較する。月の見方が似ているなら、他のものの見方も似ているかもしれない。お互いの国の詩歌について比較することは、きっと新たな発見を生むはずだ。

スロヴェニアはとても魅力的で、興味深い国である。そのような国と二〇一八年十二月に、日本文学科において直接的な交流の機会を持つことになった。「文学交流」とはお互いに相手の国のことに興味を持ち、学び、理解しようとすることである。それは決して一方通行であってはならない。今はまだ十分に知っているとは言えないスロヴェニアのことを知り、互いの文化に尊敬できるところや学ぶべきところを見出し、深く実りのある「文学交流」ができるよう努力してゆきたい。

海外で活躍する日本文学科生

「日文生が留学に行く」とは

二〇一七年度卒　吉村　安寿

「突然ですが質問です。あなたの目の前に留学から帰ってきた友人がいるとします。さて、その友人の学部や学科は何でしょう？」おそらくよくある回答としては、英米、国政、総文の三つであろう。法学、経済、経営、社情とくると「ふーん、まあ、なるほど」ぐらいで、理工となると「へぇー何の研究をしに？」といった反応がくるであろう。しかしそこで「日文」と答える人はあまり、というより「ほぼほぼ」いないと思う。

実際、私が留学すると人に伝えた時もそうであった。休学願の用紙をスチューデントセンターに取りに行くと「英文の学生さんですか」と窓口で聞かれたし、友人には「え、何しに行くの？」と真顔で返された。確かに、青学の交換留学先を見ても英語や経済の単位が取れる授業はあっても、日本文学や日本語に関する授業がある大学はない。

だからと言って「なんで日文なのに留学に行くの」と聞かれるほど「日文生が留学に行くことは変なことなのか」と当時は釈然としない気持ちであった。では、そんな私がなぜに留学に行ったのか。それは「学生時代に日本以外の国で生活してみたかった」からである。「え、そんな理由で？社会人になってからでもいいんじゃない？」と思う方もいるだろう。しかし、実は「学生」というのがキーワードなのである。社会人として海外に住もうとすると、全てにおいて自己責任であり、様々な場面で制約を受けたりする。しかし「学生」であるとその一部が免除されたりなどと、適度な自由と保護の間で海外に住むことができるのである。特にヨーロッパに関して言えば「学生」であると居住費や交通費などの面で優遇されることが多い。

かなり話がそれてしまったが、とにかく私がその一年間で何を得たのかというと、それは経験である。大学で英語教育や言語学、芸術学といった授業を受け、レポートを提出したという経験だけではない。むしろそれより、二ヶ月にも渡る欧州一周旅行やランゲージエクスチェンジなどの経験の方が帰国後、私にとって多大な影響を及ぼしたのである。というのも、その経験が文学を読み解く際に大いに役に立ったのである。文学を読み解く際、「何故なのか」と想像して考えるが、自分が経験した事もないことについて想像するのには限界がある。しかし、様々な経験をすることによって引き出しが増え、より深く考えることができた。また他にも、異なる文化を知ることによって、いままでとは違った面からの日本文化との比較ができるようになった、といった影響があった。

他の留学体験記を読んでいると立派なことばかり書いてあり、自分には無理と思ってしまうかもしれない。でも別に高い志を持って勉強に打ち込むだけが意味のあることではないと、私は考える。単純なきっかけでも、普段とは違う環境に身を置き、翻弄され、刺激を受け、考え抜き、発見をする。これも意味のあることなのである。そして、そこで得た経験は何にも代えがたく、人生にとって重要であることが多い。私もこの留学を通して「実際その場に行く、人と人が直接会う」という実体験がいかに重要かということに気づき、その実体験を人に提供したいという思いで国際会議や学術集会を運営する今の会社を志望した。別に立派な理由がなくてもいい。一年じゃなくてもいい。留学じゃなくてもいい。青学の日文生には様々な環境に身を置き、色んな体験をしてもらいたいと思う。文学を学ぶ上で、その経験が一切無駄になることはなく、むしろ学びを豊かにしてくれると身をもって知った先輩からのちょっとしたアドバイスである。

二カ国に留学して

4D　五味奈々佳

中学生の頃から興味を持ち、勉強し始めた韓国語。自然と増えた

韓国人の友人と徐々に会話も成り立ち始めた頃、私は教科書通りではない言い回しや、流行り言葉などが気になり始め、もっと韓国人が話すような韓国語を深く知りたい、いつか韓国で勉強してみたいと思うようになりました。日本から近い国ですので、旅行や短期留学を重ね、ついに大学二年生の時にその思いが実現し、私費留学で一年間、韓国へ留学することができました。

　韓国留学生活中は楽しい事ばかりでしたが、一番印象に残った出来事は、「韓国語で出前料理を注文できたこと」でしょうか。日本のそれに比べ、気軽にいろいろな場所に、食事を宅配してくれますが、最初に挑戦したときは本当にドキドキでした。韓国人はおしなべて早口の人が多く、増してや一対一の電話。こちらの場所や、注文したいものをきちんと伝えられるのか?…結果は上々、希望通りの内容で手元に配達された時は、韓国語が一段階レベルアップ出来たと思えた瞬間でした。その後は、友人と一緒に楽しく、嬉しい食事の時間になったことは言うまでもありません。

　しかし、韓国留学生活の中で一つ気になることも出てきました。それは、自分の英語のレベルについてでした。韓国語の学習にあたって、先生が単語の意味や文法を韓国語で説明しますが、質問が出されたり、韓国語ではなかなか伝わらない時があると、英語を使う場面に幾度か遭遇しました。がしかし、恥ずかしながら、その意味が理解できない事があり、それが心の中で引っ掛かりとなりました。このような場合は、やはり世界共通語と言われる英語なのだな、英語ももっと理解できるようになりたいという気持ちが大きくなっていきました。

　韓国から日本に帰国し、思い出話と一緒に、私の思いを話したところ、家族の理解もあり、カナダに私費留学する事が出来ました。大学三年生の時の話です。

　治安もよく、通いたい学校も見つかったので、カナダのバンクーバーに留学先を決めました。

　世界共通語の英語を学ぶとなると学習者の幅も広がり、世界各国の留学生が集まるので、実に様々な国の人々と知り合えることになりました。ブラジル、ロシア、サウジアラビア、トルコ、イタリア、旅行でさえも訪れたことのない国の友達が次々とでき、帰国した現在でも、ＳＮＳを中心にお互いの近況を知らせ合ったりしています。そんなたくさんの出会いの中から、カナダで一番印象に残った思い出は何かというと、サウジアラビアの友人に誘われ、一緒に「ラマダーン」と言うイスラム教の断食期間をプチ体験した事です。簡単に言うと、一ヶ月間、日の出から日没まで何も食べてはいけない期間で、友人の説明によると、「自身を清め、アッラーの神様と向き合う」のだそうです。私はサウジアラビアの友人と二日だけ同じ生活をしてみました。普段の生活リズムとは違い、日中は食べ物を口にしないのは、不思議な感覚でした。自分にとってイスラム教文化に触れる初めての経験だったので、ラマダーンの意味を知り、ほんのちょっとではありましたが、ここでの出会いがなかったら、この体験もできなかったなと思いました。

　異なる二つの国への留学、私は、日本人の割合が低い学校を選びました。追い込まれないと前に進めないタイプ、でもあまり人見知りするタイプではないので、結果としては良かったと思います。

　語学力アップはもちろんですが、日本にいたら出来なかった、他の国の文化や、実際の暮らしを知る楽しさを知ったことも大きな学びでしたし、初めての一人暮らしも、私を成長させてくれたと思います。また、各所で出会った諸国の留学生や、地元のスーパーの店員さんなどとの出会いを通して、世界のどこの国に居ても人と人の繋がりはとても大切なものであり、積極的にコミュニケーションを取ろうと一歩踏み出す事で、相手の心を開き、互いの理解も深まると、改めて気づかされました。この二回の留学の機会を与えられたことに感謝しています。

日本文学科留学生の動向

日本文学科教授　佐伯　眞一

　二〇一八年五月現在、日本文学科在籍の私費留学生は全部で三二名、そのうち二〇一八年度の入学

者は八名です。また、大学院では、博士後期課程のボニー・マックルーアさんはアメリカへ、博士前期課程を修了した呉章娣さんは中国へ帰りましたが、黄郁婷さんは、博士前期課程から後期課程に進みました。今後の活躍が期待されます。

学部の一年次では「日本文化文学入門」を履修するように指導しています。この科目では独自テキスト『留学生のための日本文学入門』を使用していますが、それによって学ぶだけではなく、日本文学科の専門科目に関する質問を受け、指導することに時間を割いています。

また、留学生には、上級生がチューターとして指導にあたることになっています。二〇一八年度のチューターは、笠原咲・石川純花・山田航輝・陳伯丞（チンハクセイ）の四名です。教員とチューターは、留学生と共に、年に二回ほど文化交流活動を行っています。春には懇親会を開催、また秋にはあちこちの見学に出かけます（二〇一七年度は六義園・東洋文庫・森鷗外記念館などを見学しました。二〇一八年度も留学生の意見を聞きつつ企画中です）。

履修登録の指導から交流活動まで、留学生にとってチューターは常に必要です。興味のある在学生は、是非やってみてください。現在のチューターの笠原さんから、最後に一言。

チューターをしていて常々感じることは、留学生の皆さんの方が私たち日本人よりもずっと日本文化・日本文学に詳しいということです。特に日本文学科に所属している留学生の日本に対する見方や知識には、こちらがハッとさせられることも多く、こちらが教えることよりも、むしろ学ぶことの方が多いなと思う日々です。チューターの魅力は、身近に国際交流や異文化理解が出来ること、そして何より様々な文化圏の友人が出来ることです。留学生と仲良くなりたい方、また異文化や自国文化への興味を深めたい方、ぜひ一緒に活動を盛り上げていきましょう！

卒業生・4年生からのメッセージ

「就職活動体験記（民間企業）」

4C　朝山麻衣子

二〇一八年度卒の就職活動は三月に本格的に解禁しました。私は五月末に、入社を決めた精密機械メーカーに内々定をもらい、六月初旬に就活を終えました。就活事情も希望する業界も異なる方が多いと思いますが、参考にして役立ててもらえたら嬉しいです。

就活の前段階として、インターンシップがあります。周りの友人が早くから動いていると不安になりますが、その必要性を私なりに考えてみました。

ひとつは、業界研究の材料にすることです。特に、希望する業界がわかっていない人ほど行くと良いと思います。私も、三年生の前期は民間企業そのものが、よくわかりませんでした。そこで夏休み期間に十社ほどのインターンシップに参加しました。それらは全て一日又は半日のものです。それぞれ異なる業界や様々な業種を選ぶよう心掛けました。参加してどこに共感し、どこに違和感を持ったのか考えることを繰り返して、希望の業界や就活の軸を固めました。

もうひとつは、就活や社会との関わり方の練習にすることです。インターンシップの選考でESや筆記試験等があっても面倒臭がらず、練習だと思って挑戦しました。また、その後のメールや電話のやり取りを通して、就活では抵抗なく対応できるほど慣れました。インターンシップに行って損ということは無いと思います。ぜひ挑戦してください。

そして、実際に就活が始まると心身共に疲れが出てきます。日々個人で動くことが多く、大学の講義もあまり受けられません。私のストレス発散方法は、ときどき友人やサークルの後輩と会って話をすることでした。息抜きになるし、本来の大学生の自分を取り戻せた気がしました。

また、就寝時間を削るほどの予定は入れないことにしていました。取捨選択することに不安を感じることもありましたが、無理のない予定を組むことで、毎回ベストな力を出せたと感じています。

人の数だけ、就活の仕方や仕事に対する考え方はあります。今回の就活を通して感じたことは、真偽のほども分からない情報が溢れる中で、自分の考えをしっかりともつことの重要性です。これは、今後の社会人として働く上でも必要になると思います。

皆さんが悔いのない就職活動ができるよう、願っています。

「就職活動体験記（民間企業）」

4A　金　兌珍

「そろそろ動かなきゃ」と思いながらも「なんとかなる」と根拠のない自信を持っていた私は、就職活動に向けた準備を怠けていた。就職活動に当たって必ずやっておくべきだと言われる業界・自己分析もしなかったため、「やりたいこと」も分からないまま気がついたら3月になり、私の就職活動は始まった。

3月になると、みんながウソのようにテキパキと動きはじめ、自分がいわゆる「やばい状態」であることに気づいた。そして、負けまいとスケジュールを埋めていき、びっしりと埋まったスケジュールを見ながら安堵感に浸っていた。

また、他の人より遅れていることに焦っていたけれど、周りの人から認められたいという気持ちが強く、大手企業の選考ばかりを受けていた。しかし、殆どの選考から落とされた時、自分の就職活動のやり方が間違っていることに気がついた。

このままだと時間だけが過ぎていくと思い、はじめて「就職活動」について真剣に考えた。自分と向き合って「なりたい自分」をイメージしながら「好きなもの」「やりたいこと」を嫌になる程考えた。そして、これまで第一と考えていた「企業名」に捉われず、「やりたいこと」「なりたい自分」の実現ができる企業に挑戦することを決め、就職活動を再開した。

幸いに第一志望だった百貨店業界から内々定を頂き、無事、就職活動を終えることができた。しかし、就職活動のやり方を見直さず、周りに流されるような就職活動を続けていたら、決して良い結果にはならなかったと思う。

就職活動を目の前にしている留学生へ、多くの企業が面接前の選考として実施しているＳＰＩとＧＤは、就職活動が始まる前に徹底的に対策しておくことを勧めたい。

ＳＰＩは日本語の速読が、ＧＤは日本人と対等な立場で会話の流れに参加し論理的な発言をすることが、必要とされる。一見、簡単そうに見えるため、これらの選考を軽視する留学生も多いが、実は、留学生にとって難しい選考なのである。

また、就職活動を終え、振り返ってみると就職活動における最も大事なキーワードは、やはり「自己分析」ではないかと思う。まずは「自分」を知ることが悔いのない就職活動に繋がるのではないだろうか。

「大学院に進学して」

博士前期課程一年　渡部　湧己

漢詩の魅力に取り憑かれた私は、いつの間にやら大学院進学という、同学年の友人たちとは些か異なった進路へと舵を切っておりました。

皆が就職活動に勤しむなかこのような進路を選んだことについて、思うところがなかったといえば嘘になります。博士前期課程の修了までなら二年遅れで就職活動を行うことになり、博士後期課程に進むともなればそれはもう茨の道です。

それでも私は大学院への進学を選びました。漢詩・日本文学への憧憬あってのことです。大学生活の四年間を費やしてもまだ足りない、せめてもう二年、そう思ったからこその進学でした。

現在私は、李白の詩、特に七言絶句についての考察を行っています。今はまだ「研究」というよりその下準備にあたる調査（李白の全集より七言絶句を抽出し、注釈

も含めて読み込み、考察することの繰り返し）が主ですが、これが後の研究に生きてくると思うとなかなかやりがいがあり、何より作品ひとつひとつが魅力的であるため退屈することがありません。

大学院進学を視野に入れる学生に、心がけるべきこととして言えるのは「日々の授業はきちんと受けること」「卒論に力を注ぐこと」の二つです。

「日々の授業をきちんと受けること」、こちらは全ての前提になります。入試対策の知識の基盤を得るためであるのは勿論のこと（とはいえ、授業の内容だけ暗記していてもどうしても知識の穴はできてしまうものなので、そこは国語便覧や市販の日本文学史や変体仮名の本などで埋めましょう）、卒論におけるテーマ設定や考察の糸口になります。さらに大学院では卒論を執筆した専門分野以外の科目も履修する必要があるため、幅広い知識を身につけておくことは必ず助けになるでしょう。

「卒論に力を注ぐこと」、こちらも最終的には重要になってきます。何故なら卒論をきちんと書けていないと、その延長線上にある修士論文に繋げるのが難しくなってしまうからです。早い段階で卒論を固めておくことは、願書と同時に提出する研究計画書の執筆においても役に立ちます。

以上の二点を当たり前のように実行できる学生であればおそらく、入試はもとより、進学後も充実した大学院ライフを送ることができるのではないかと思われます。

「教員になるまで」

所沢市立所沢中勤務
二〇一六年度卒　粕谷　昌吾

日本文学科の卒業生として、私が教員になるまでの体験等をここに記しておきますので、教員になろうかなぁと思っている方はご覧になってください。そうしていただけると、私のこの夏休みの宿題も浮かばれます。

まず始めに、私が教員を志したのは入学当初からでした。最初はなんとなく高校で猛勉強した事を生かせれば、としか思っていませんでした。しかし、アルバイトの塾講師での体験や学校ボランティアでの体験を通して知識を伝えていくことの楽しさを感じて本格的に志すようになりました。

さて、教員を本格的に目指すに当たって私は予備校に通うようになりました。教員採用試験に向けて予備校に通う人は珍しくないので、勉強が心配だと思う人は通うのも良いでしょう。というのも、そのときに聞いた情報として教員採用試験の倍率の厳しさを思い知ったからです。私が採用試験を受けた埼玉県では倍率が六倍ほどでしたが、実際には合格者のなかでも現役（新卒一年目）合格者は約二割程度しかいないというのです。これは早めに準備しておいて損をするということは無いな、と当時の私は思いました。そこで私は三年生の九月から予備校に通い始めたのですが、実際にはもっと後から始めた人もいたので、勉強の開始時期は人それぞれかもしれません。

また、一次試験を突破しても二次試験があります。特に面接試験や小論文の対策は必須です。私の場合、良き友と先輩方に恵まれたため、「日文塾」という集まりの中で徹底的に、繰り返し練習を行ったおかげで突破できました。そのときに協力していただいた高橋邦伯先生や、授業見学をさせていただいた甲斐利恵子先生を始め多くの先生の協力があって教員になることができました。採用試験を突破するに当たって最も重要なのが、この「一緒に頑張れる仲間」の存在です。特に、採用試験の日程は遅く、周りの友人の進路が決まっていく焦りの中で共に頑張れる仲間はとても大切な存在です。是非とも大事にしてください。

最後に一つ、独り言を聞いて下さい。誰もが認めて欲しくて頑張っています。優しい目で彼らの頑張りを認めてあげられるような皆さんが、教員になる日を私は心より待ち望んでいます。

夏期集中講義報告（日本文学特講Ａ）

３Ａ　石河　純花

今年度の夏期集中講義（日本文学特講Ａ）では、本学日本文学科の卒業生であり、狂言師としてご活躍中の野村太一郎先生をお迎えして、「狂言を通して古典文学を学ぶ」と題した授業をしていただきました。

初日と二日目は、能楽の舞台や衣装の意味、成立の歴史など、鑑賞する上で必要不可欠な基礎知識を習得しました。三日目は江戸川橋にある「よいや舞台」を借りて実際に狂言の発声や所作を体験しました。能舞台の雰囲気や、演者の気持ちを肌で感じることができ、とても有意義な時間となりました。最終日には、前日の体験を踏まえ疑問に思ったことなど、受講者の素朴な質問に、親身になって答えてくださいました。

教室での講義の際には、様々な演目のＤＶＤを見ながら学んでいきました。本物を見たことがなくても分かりやすく、かつ面白いと思えるものを選んでくださったので、能楽がより身近なものとして感じられるようになりました。履修者のうち、歌舞伎や日本舞踊を含め、古典芸能を生で見たことのある人は半分程度でした。能楽に興味を持った理由は人それぞれで、授業で演劇について学んでいるから、一度能楽堂に足を運んでみたいと思っているから、などがありました。異なる専門分野の人と意見を交わしたり、感想を述べあったりしたことで、さらに理解が深められ、お互い刺激を受けることができました。

能楽というと、敷居が高くとっつきにくいイメージのある人が多いと思います。動きがゆっくりで、話が少しずつしか展開しない演目が存在することも確かです。ですが、これは能に多く見られ、狂言は早いテンポで見ていて楽しい演目が多いことを実感できる内容でした。能と狂言は、同じ舞台で演じられますが、違うところもたくさんあります。例えば、能はお殿様に見せるためのものとして生まれたので、足袋の色は高級さを表す白に限定されています。一方狂言では、偉い人に見せるという能の決まりに反発し、庶民に見てもらうことを意識しているため、土色に似ている黄色の足袋を使うことがある、といった具合です。

また狂言では、言い間違えや聞き間違え、取り違えなどのパターンとシリーズがよくあります。「末広がり」という演目では、主人が太郎冠者に、末広がりを買ってこいと命じますが、それが扇を表すことを知らなかった太郎冠者は、詐欺師に騙され、傘を買わされてしまいます。持ち帰った傘を見て、主人は怒りますが、詐欺師に教わった囃子物をうたってきげんをとる、といった話です。このように結末がはっきりしているものもあれば、登場人物はこの後どうなったのだろう、と鑑賞者に解釈を委ねるものもあり、これが狂言の魅力の一つだと先生はおっしゃっていました。

他にも木の実や妖精、狐などが登場する話、お祈りするごとに茸の数が増えていく話など、どれも印象に残るものでした。特に三日目に面を付け、衣装を着るという貴重な経験ができたことに感謝しています。古典芸能に興味を持つ人がもっと増えていくことを願わずにはいられない四日間でした。

研究室探訪

山崎藍先生編

＊何を専攻して研究をなさっているのですか？

専攻は漢文学、中国の古典文学ですね。具体的には唐代の詩や小説を読み解く研究をしています。

＊その分野を専攻なさったきっかけや理由はなんですか？

私は元々、文学に全く興味が無かったんですよ。私の祖父や曾祖父は国語の教員で、いとこは非常に文学的な才能がある人でした。周囲に文学に関わる人が多い環境で、彼らに比べると自分は文学の才能は無いと感じて興味が持てなかったんです。なので、大学の進路を決める時、最初は文学ではなく東洋史を専攻しようと思っていました。しかし東洋史を研究していた母にそれを伝えると「あなたは東洋史に向いていない」と言われてしまったんです。それが高校二年生で、ではどこに行こうかと悩んでしまいました。結局、自分は西洋よりはアジアに興味があるから、とりあえず、アジアを広く浅く学べるところに行って、学んでいく過程で好きなものを見つけていけば良いと考えたんです。で、たまたま受けた大学の入試で面接をしてくださった先生、その時もう六〇歳過ぎてらっしゃったと思うのですが、福山雅治さんのような素敵なお声をされていたんです。話し方や話される内容もすごく紳士的で、「この大学に受かったらこの人の講義をとろう」と考えました。その先生のご専門が中国古典文学だったんです。講義の第一回目に、先生が武田泰淳の『司馬遷』の冒頭部分をすごく良い声で読まれた時、心を打ち抜かれてしまって、「私はこの先生のゼミに入ろう」と勝手に決めてしまいました。文学が好きだとかそういった気持ちは一切なく、ただこの先生が好き、という理由でした。先生にとっては良い迷惑だったと思います。結局、その先生に指導いただいて卒論を中国文学で書き、今に至っています。

＊漢文学は日本文学を学ぶ学生にとっては少し遠いイメージがありますが、我々が漢文学に触れるきっかけになれそうな本などがあれば教えてください。

近現代の文学には中国の作品をもとにした例がたくさんありますから、自分の専攻分野から関連する資料をたどって漢文学に触れることも出来ると思います。例えば教科書にも出てくる中島敦の『山月記』は、中国の古典文学「李徴」をもとにして作られていることは良く知られています。それらの違いを比較するのも確かに面白いですが、『山月記』の数年前に佐藤春夫も親友が虎になった話を書いているんです。佐藤春夫は何をもとにして作品を書いたのか。彼が読んだと思われる和訳された中国の小説やその原典を読んでみたらどうなるか。もっと深く読み解けるのではないか。こういうやり方でも漢文学に触れることが出来ます。他にも、落語の「まんじゅうこわい」は、明代の『笑府』や『五雑組』に収められている小説をもとにしているんです。唐詩を始めとする漢詩は言うまでも無く日本人の素養として文化の下地になっていますが、それ以外にも中国文学に触れる機会はたくさんあるんですよ。

＊漢文学をやられていく中で先生自身が面白いと感じるのはどこですか？

私は唐詩を専門に研究しているので、自分なりに深い読みが出来た時や新しい解釈を提示できた時に「ぞわっ」と嬉しくなります。

＊先生が一番好きな作品を教えてください

唐詩の中で好きな詩はたくさんありますが、研究者として生きていくためのバックボーンにしているのはこの詩です。

「不経幾番風霜苦、難得春梅吐清香。」

これは私が修士の試験に受かったときに、先程お話しした、声が良い先生（竹田晃先生）が自身の御著書の裏表紙に書いて私にくださった詩なんです。「元々東京大学の総長が引用したもので、誰が書いたか分からない詩なんだけれども、君に伝えたいと思ったんだ」と仰ってくださって。風とか霜とかの苦しみを経なければ、春の梅が清らかな香りを放つのは難しいという意味です。私は大学院に合格するまでに時間がかかったんですが、その経験も意味があると伝えてくださったんですね。二句しかないので詩としては完結しておらず、今、作者を探しているのですが、まだ見つかっていません。（留守電の音声を聞かせていただきましたが、竹田晃先生は正真正銘の良い声でした。）

＊研究室には週にどのくらいいらっしゃいますか？

週に三回くらい、講義がある日に来ています。

＊研究室にはどのくらいの本がありますか？

少ない方だと思います。（委員所感：千冊以上あります）研究室が手狭だと伺って、赴任する前にだいぶ処分しました。自宅にはほとんど本は無く、研究に必要な本は主に研究室に置いています。場所の問題もあって、最近は電子化することも多いですね。概論の講義をやると紀元前から十八世紀くらいまで網羅しないといけないので、全ての本を置いていられないのです。運び込むときに図書の人が悲鳴を上げたので千冊ではおさまらないかもしれませんが、他の人よりとりわけ多いとは思いません。五百タイトルくらいかな。（一タイトル三十巻のものもある。）

＊全部読まれているんですか？

ある程度。隅から隅まで覚えている訳ではないです。「もしかしたら読むかも」と思って買って放置していたものを、数年経った今、卒論指導で使うなんてこともあります。

＊この中で一冊好きな本を選ぶなら？

研究室ではなく自宅にありますが『中国小説史入門』（岩波書店）です。先程伝えた竹田先生に詩を書いていただいた本です。プライスレスというか値段がつけられない、大切なものですね。

＊研究室の本って本屋とかで買うんですか？

本屋でも買いますが、今はネットが主です。「日本の古本屋」という古書を専門に扱うサイトがあって便利です。実際に本を見たい時には、神保町にある中国書を専門に扱う書店で買います。中国で購入することもありますね。

＊学内／学外問わず好きな場所は？

AGUカフェ。「手作りプリン」と「チーズスフレ」が美味しいです。私と同じ4月に赴任した先生におすすめされて食べたらはまってしまいました。数年前非常勤で来ていた頃は、カフェがあった記憶がなく、校舎も古かった印象なのですが、今はオシャレになってますね。

＊研究室ではどのようなことをするのですか？

研究や講義準備は原則家でやるので、主にゼミ・院ゼミの時に使っています。

＊宝物はなんですか？（自宅が火事になったときに一つだけ持ち出すなら）

言ってしまうと、子供だね。

＊お子さん以外にも、物とかですと…

先程の本もいいけど、それは無くなったら無くなったで。やっぱり現実的にはパソコンかなあ。

＊データは本当に重要ですよね。以前スマホのデータが消えかけて、今までのラインや写真が全部無くなりそうになったことがあって。泣きそうになりながらAppleに電話したことがあります。

最後に学生に向けてのメッセージをお願いします。

日本文学科の学生さんの中には、漢文って難しい、面倒だと思われる方がいますね。でも、日本人の教養として漢文学というのは歴然とあったものなので、まずは関心を持ってもらえると有りがたいです。（学生の皆さんは）漢詩はもちろんのことといろいろな場面で中国文学に触れているはずですから、どこかに接点は必ずあります。中国文学を読んだ上で日本文学の作品を読めば、より深く味わえます。そのような補助的な役割に漢文を位置付けても全く構いませんから、まずは中国文学の講義を取ったり本を手に取ってみたりしてみてください。

院生部会報告

二〇一八年度日文院生部会代表
博士後期課程一年　**内村　文紀**

桜が散り、新緑を挟み五月雨の日々、太陽に身を焦がされて時はゆく。黄金色の異臭の爆弾が今年も誰かを泣かせようか。繰り返される青山キャンパスの風景。

軋みながら繰り返されてゆく院生部会の日めくりの中で、最大の仕事は何といっても「修士学位申請論文等の中間報告会」であろう。『大学院要覧』にもあるが、修士号を掴まんと荒野を、道なき道を行く者、その何人たりともが避けては通ることのできぬ試練の一つである。今年度は七月十一日に14603教室で行われ、中古文学二人、近代文学一人、日本語教育一人の計四人が、旅の道すがら、試練を受けた。

その裏で見落とされがちではあるが、院生部会の代表は毎年〳〵、五月下旬の院生総会での引継ぎ直後から右往左往しながら「その日」のための準備を進めている――これまでの歴代代表の方々よ、万感の思いを込めて、お疲れさま、である。来年度からは変更点もあるが、次代以降も頑張ってほしい――。さらに「その日」は総合司会として発表者と同じ方角を見ることになるのだ。が、二葉亭四迷に似た指導教官から「ないーぶ」と評されるほどの、豆腐ならぬ「おからメンタル」の持ち主である筆者は、使うことにならないよう祈りつつ、「胃薬」を懐へと忍ばせていた。

結論から記すと、胃薬はただの置物と化した。開かれたのは胃薬のそれではなく、参加者の口であった。先生方、院生たちから活発な質疑が飛んだ。それを発表者は正面から受け止め、切り返す。来年度以降に同じ試練を受ける博士前期課程の院生だけでなく、「修士は遠きになりにけり」と高踏派に片足を突っ込みかけた諸賢にも大いなる刺激となったに違いない。代表として、今後の飛躍を望もう。

また『緑岡詞林』について。電子化の権利が院生部会に帰属している四〇号以降を、先生方からの薦めもあって、リポジトリ登録することとなった。認知度が上がるきっかけとなれば幸いである。

今年度の学生の活躍

【二〇一八年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】
◇学部　最優秀賞　北住悠（四年）
◇学部　優秀賞　川上大地（三年）、宮崎綾（二年）
◇学部　奨励賞　藤井さやか（四年）、高野真子（三年）、長谷川真那（二年）

【第12回全日本学生・ジュニア短歌大会（日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育委員会後援）】
◇岡崎洋次郎賞　井藤智也（二年）
またですか無理な願いを押し付けて神様だって忙しいんだ
◇長澤ちづ賞　平本綾香（三年）
「わんわん！」と姪が指差すその先にたぬきの親子ただいま故郷
◇秀作賞　秋葉翔太（二年）
古ぼけた頁を捲りまた探す栞代わりの涙の染みを
渡辺翼（三年）
そんな目をされても困る本当は特別だった。だから、さよなら
槇あすか（四年）
「うつるからマスクの上から」くちづけの二月の記憶ずいぶん遠い

◇優良賞　蒔山智郎（二年）
◇奨励賞　李静誼（二年）

【第13回「青山歌壇」（青山学院）】
◇最優良賞　小野和実（三年）
◇優秀賞　黄郁婷（博士後期課程一年）

《二〇一七年度》（学年は当時）
【第23回「前田純孝賞」学生短歌コンクール（兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催）】
◇準前田純孝賞　阿部拓樹（三年）
◇神戸新聞社賞　茂木綾音（二年）
◇佳作　柳原美月（二年）、草薙由莉（三年）

＊「日本文学科関係書籍」については、紙面の都合で次号にまとめて掲載します。

日本文学科同窓会から

一九七七年度卒　大塚　修平

同窓会では、教養講座として講演会や文学散歩などを行っております。これまでに朗読会、落語会、文学散歩などを開催してきました。

今年は6月に『芭蕉を偲び、深川界隈を巡る』と題して、深川における芭蕉の足跡を訪ねる企画を実施いたしました。

今回は特別企画として句会を計画。吟行も考えましたが、「誰も来ないよ。」という意見もあり、当日に2句を作ってくる持ち寄り句会としました。参加者なしの危惧をよそに19人の参加者がありました。

深川の道案内は同窓会理事の工藤芳弘さん（82卒）。工藤さんは、江東区で長く教職に就かれており、この地区の案内もたびたびされたと伺い、早速依頼。快諾してくださった上、句会の場所についても芭蕉記念館という絶好の場所を確保していただいた。

当日は好天に恵まれ、深川江戸資料館を皮切りに、昼食のあと芭蕉の足跡を2時間ほどかけて回り、句会の場所である芭蕉記念館へ。

いよいよ句会。参加者のほとんどが句会は初めてとのことで、今回の句会の流れを説明。参加者に短冊を2枚ずつ配布。作ってきた2句をそれぞれの短冊に書き写す。書き終えたころを見計らって短冊を集める。各人の俳句を1枚の清記用紙に写し取り、これをコピーして各人に配付。それぞれ好みの俳句を選び、順番にその句を発表。選んだ人の多かった句についてのみ、それぞれ選定理由を伺った後、作者に名乗ってもらう。選ばれた人は少し照れながら軽く会釈する。若干のどよめきがある。句会らしくなった。当初実施に不安のあった句会でしたが、参加者から「文学とは無縁でしたが、句会は楽しかった。」との感想を頂き、所期の目的を達成した思いです。

そして、9月23日の同窓祭の「日文の部屋」では、この教養講座の1日をまとめた映像が流されました。この映像を作ってくれたのは、NHKに勤務されている渡部英美さん（79卒）。6分ほどの作品ですがナレーションにひきこまれ、じっくりと深川、芭蕉に浸ることができました。何度か放映しましたが、その都度歓声が起こり、さすがプロの仕事という感想しきりでした。今後も、楽しみと学びの講座を企画していけたらと思います。

二〇一八年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究（一）
『日本書紀』を読み直す　矢嶋　泉

上代文学演習（二）
萬葉・書物・文学交流の新研究　小松　靖彦

中古文学演習（一）
『枕草子』を読む　土方　洋一

中古文学研究（二）
古今和歌集成立の意義について　高田　祐彦

中世文学演習（一）
『六代御前物語』の輪読　佐伯　眞一

中世文学研究（二）
『道堅自歌合』の研究および、注釈の作成　山本　啓介

近世文学研究（一）
黄表紙『花団子食家物語』を読む　大屋多詠子

近世文学演習（二）
「百物語」と江戸の出版戦略について　篠原　進

近代文学研究（一）
論文についての発表―批評　片山　宏行
近代文学演習（二）
近現代学会発表論文の完成　日置　俊次
近代文学演習（三）
泉鏡花作品の読解・考察　吉田　昌志
近代文学研究（三）
昭和期の作品から探る、近現代文学の文化・思想　佐藤　泉
韻文学研究
梵灯庵『長短抄』注釈　廣木　一人
劇文学研究
「劇文学」の世界を多角的に知る　根岸　理子
日本語学演習（一）
コーパス言語学の理論と方法　近藤　泰弘
日本語学研究（二）
「話しことば」の研究　奥田　芳和
日本語教育学研究
日本語教育における語彙指導について　山下　喜代
中国古典学演習
昭明太子蕭統『文選』を読む　山崎　藍

〈学部〉

文学研究法
文学・日本語学研究に必要な知識と方法の習得　矢嶋　泉
文学研究の基礎力・原本読解能力の養成　山本　啓介
文学テキストの扱い方と文学研究方法の習得　佐伯　眞一
文学研究の基本的な手続き、方法の習得　高田　祐彦

日本文学史
上代・中古文学史　高田　祐彦
中世文学史　山本　啓介
江戸時代の文学史　大屋多詠子
近代文学史　片山　宏行

古典文学概論
江戸文学を入り口に、古典文学について考える　大屋　多詠子

近代文学概論
短編小説の世界　日置　俊次

漢文学概論
中国文学が日本文学に与えた影響について　山崎　藍

日本語日本文学情報処理法
コンピュータを研究で有効活用するためのデータの整理と処理について　岡田　一祐

日本語学概論
日本語の仕組みを学習する　近藤　泰弘

日本語史
日本語の歴史について　田中　草大

表象文化研究概論
表象研究の方法の習得と領域横断的な知の再編を目指す　村上　克尚

日本学入門
「日本学」を通じて、日本の言語・文学・文化を考察する　小松　靖彦

文学交流入門
日本文学を「文学交流」の視点から展望する　小松　靖彦

日本文化文学入門
留学生のための日本文化文学入門　佐伯　眞一

日本文学演習
『萬葉集』の美とその翻訳　小松　靖彦
『古事記』の世界　矢嶋　泉
『源氏物語』葵巻精読　高田　祐彦
『枕草子』を読む　津島　知明
『更科日記』を読む　吉野　瑞恵
『新古今和歌集』研究　山本　啓介
『平家物語』を読む　佐伯　眞一
『今昔物語集』を読む　目黒　将史
井原西鶴の浮世草子　石塚　修
黄表紙『御存商売物』を読む　大屋多詠子
西鶴の俳諧を読む　水谷　隆之

卒論に向けて　片山　宏行
現代短歌の研究と実作　日置　俊次
大正から昭和初期、戦後の評論　佐藤　泉
大正期の短篇小説　掛野　剛史
戦後から一九七〇年代までの現代文学　村上　克尚
劇文学の世界を多角的に知る　根岸　理子

翻訳演習
日本古典文学が外国語に翻訳されることの意味、日本語と日本文学・文化の多様性について　常田　槙子

中国古典文学演習
『聊斎志異』を読む　山崎　藍

中国文学・思想演習
漢文訓読の基礎的な知識を修得する　加納留美子

文学交流演習
古代の日本文学に即して、インドとの交流を考える　藏中しのぶ

日本語学演習
大正時代から現在に至る、発音・アクセントの変化について　中川　秀太
日本語の特徴を明らかにする　奥田　芳和
日本語学研究の方法論全般について　近藤　泰弘

日本語・日本語教育演習
標準語ではない日本語　白岩　広行

日本文学講読
『狭衣物語』を読む　吉野　瑞恵
中世における説話・物語を読む　目黒　将史
近代文学作品の読解　植田　理子
『記』『紀』『萬葉』を読み解く　松田　浩
草双紙を読み、変体仮名の基礎知識を習得する　二又　淳

中国古典文学講読
中国古典文献を読解・鑑賞する　山崎　藍

日本語学講読
日本語の歴史的変遷の様相を、語彙・文法の面から考える　鴻野　知暁

書道の歴史と実技
中国書道史と実技　鈴木　晴彦
日本の風土に根差した書の美を、名品を臨書しながら学ぶ　柿木原くみ

日本語教育概論
日本語教育の現状や内容、指導方法について理解を深める　山下　喜代

日本語教授法
外国人に教える「日本語教育」について、基本的な知識・手法を学ぶ　荒巻　朋子

特別演習
『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導　小松　靖彦
卒業論文作成指導　矢嶋　泉
平安文学の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導　高田　祐彦
主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導　佐伯　眞一
短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導　山本　啓介
近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導　大屋多詠子
近現代文学を対象とした卒業論文作成指導　片山　宏行
近現代文学を対象とした卒業論文作成指導　日置　俊次
現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導　佐藤　泉
中国文学に関連するジャンルに関する卒業論文作成指導　山崎　藍
日本語学を対象とした卒業論文作成指導　近藤　泰弘
日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導　澤田　淳
日本語教育や日本語に関する卒業論文作成指導　山下　喜代

日本語教育演習A
「日本語会話クラス」の開設を想定としたグループワーク及び日本語教育研究法の学習と研究レポートの作成　山下　喜代

日本語教育演習B
日本語教育における学習内容の把握、および授業計画の立案　三原　裕子

日本文学特講
大伴家持における政治意識と文学の関係について考察する　小松　靖彦
『古事記』はよめるか　矢嶋　泉
源氏物語の長編構造の仕組みを理解する　高田　祐彦
『枕草子』を精読する　津島　知明
『新古今和歌集』成立後の和歌史　山本　啓介
『平家物語』の人間関係　佐伯　眞一
近世文学を多角的に掘り起こし、理解する　染谷　智幸
『昔話稲妻表紙』の世界　大屋多詠子
菊池寛とその作品　片山　宏行
文学作品を通して、近現代社会の規律、管理の在り方を理解する　佐藤　泉
横光利一研究―短編小説の世界―　日置　俊次

文学交流特講
多言語・多文化化の進む現代の日本語をめぐる「文学交流」　河路　由佳

日本文学とアジア
アジアにおける伝承の広がり―ギリシアから日本まで―　KHALMIRZAEV A, Saida

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ
西洋諸国における近代日本文学の受容　KHEZRNEJAT, Gregory Warren

表象文化論
説話・芸術論・物語文学で読む書・香・画の世界　松岡　智之
「表象」の概念を理解し、それがどのような問題をはらむかを考える。　佐藤　泉
演劇作品と日本文学との関係を考察する　今井　克佳

日本文学特講A（集中講義）
狂言を通して古典文学を学ぶ　野村太一郎

中国文学・思想特講
唐代の詩人の作品を学ぶ　髙芝　麻子

中国古典文学特講
中国古代における文言小説について　山崎　藍

日本語学特講
電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ　近藤　泰弘
対人関係構築法や敬語の使い方等について身近な例を通して考えていく　奥田　芳和
日本語の多様性について考える　白岩　広行

日本語教育特講
日本語の文法や語彙に関する学習項目について、その指導内容と方法、教材化を考える　山下　喜代

日本語教育実習
「短期集中日本語会話クラス」の開講準備、授業実施、事後評価活動　山下　喜代

日本文学研究のための英語
日本文学を専攻する学生が、英語で書かれた日本文学・文化論を正確に理解し、自ら英語で発信する能力を養成する。　SEN, Raj Lakhi

音声表現法
状況に応じた音声表現の習得・社会での実践方法について　夷石寿賀子

文章表現法
文章技術をみがく　加藤　祥

【研究室だより】

＊二〇一八年三月の卒業生は一一三名、四月入学生は一〇九名でした。大学院前期課程三月修了生は三名、四月入学者は四名、後期課程の四月入学者は三名でした。

＊二〇一八年度から新たに非常勤講師として、石塚修、加藤詩乃、藏中しのぶ、鴻野知暁、鈴木晴彦、篠原進、白岩広行、津島知明、常田槙子、野村太一郎、水谷隆之KHEZRNEJAT, Gregory Warrenの諸先生方にご尽力いただいています。

＊二〇一八年度は、小松靖彦教授が学科主任を務められました。

＊二〇一八年度は土方洋一教授が特別研究期間（本学）のため学部の授業を休講なさいました。また、澤田淳准教授が内地留学（国立国語研究所）のため休講なさいました。

＊二〇一八年度日本文学大会（春季）・講演会・総会が六月九日に青山キャンパス、十七号館・一七三〇九教室で開催されました。講演会については本会報4頁をご覧下さい。

＊二〇一八年度日本文学大会（秋季）・講演会が十月二十七日に青山キャンパス十七号館・一七三一〇教室で開催されました。講演会については本会報6頁をご覧下さい。

＊副手の細野愛子さん、正木恵理さんが退任され、二月から十二月まで田所晴佳さんが後任を務め、四月から梅澤朋代さんが着任されました。

＊平成三十年秋の叙勲において、本学名誉教授（元学長）で近世文学がご専門の武藤元昭先生が、瑞宝中綬章を受章されました。

＊平成三十一年三月をもって、上代文学がご専門の矢嶋泉教授が、定年のため退職されます。

【編集後記】

今年の夏頃に動き始めた会報作成、例年通りこの編集後記を執筆するまでに至ることが出来、感謝とともに安堵しております。

今回の会報は、新たな試みを行った前年に倣って作成いたしました。ただ、記事の執筆について、今年度は多くの意欲ある一年生が担当を引き受けてくれたため、例年と比べてとても新鮮な内容となったことと思います。

今年度の日文委員会は、仕事内容やその分担など様々な方面を新しくしていこうと努めました。昨年までは年二回であった新聞発行を三回に増やしたり、青山祭での古本市の内容をより充実させたり。ゼミ紹介は前年よりもさらに広い教室で行うことができ、多くの一年生が余裕を持って各ゼミを巡ることができました。春季、秋季大会の運営などについて、反省すべき点は多くありましたが、手探りでも挑戦していくことは何物にも代え難い経験となりました。来年度に委員会の中心となる一年生は、より新しい委員会を作り上げてくれることと期待しております。

最後になりますが、この度本会報の記事を執筆くださいました皆様、ならびに取材にお応えくださった先生方、その他作成に携わってくださった皆様へ感謝申し上げます。また来年度、より素晴らしい会報を手に取っていただけるよう、努めて参りたいと思います。

平井　温乃

訃報・堀内秀晃名誉教授

二〇一八年五月一日、堀内秀晃先生が逝去されました。享年八七。先生は一九八三年四月に本学日本文学科に着任、一九九九年三月の定年退職までの十六年間、研究と教育に尽力されました。専門は漢文学を中心とする中古文学。著書に『竹取物語 伊勢物語』（共著、岩波書店）など。御冥福をお祈り申しあげます。

編集委員

教員

山崎　藍　山下　喜代

学生二年生

平井　温乃

学生一年生

小舟　萩　石井あづみ

若林　楓　狩野　祐輝

会　報　第五十三号

二〇一九年三月一五日　発行

〒150-8366　渋谷区渋谷四―四―二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科研究室内

編集　青山学院大学日本文学会

電話　（〇三）三四〇九―七九一七

FAX（〇三）三四〇九―八〇〇五